

2. 幼児期における自然体験学習のすすめ

幼児期は、その後の発達の基盤となるたくさんの力が培われる時期です。この時期に心の底からすばらしいと感じたこと、大切さに気づき、守っていかねばならないと感じたことは、強い信念となって子どもの中に根付き、その後の成長を大きく方向づけていきます。

豊かな自然の中で心に響くさまざまな体験をすることで、幼児は、自然の美しさ、不思議さ、心地よさ、そして厳しさまでも肌で感じ、心に刻んでいきます。それらの体験は、自分も自然の一部であること、かけがえのない自然を守り引き継いでいくことの大切さへの気づきを促します。さらに、自ら自然を守る具体的な行動へと子どもを導くこととなります。

「自然」ってなんだろう？

人類誕生の歴史の中で、私たち人間は、自然の中から生まれ、自然と共に生きてきました。衣食住における「生活」や花鳥風月に代表される「遊び」、「文化」、「行事」など、あらゆるいとなみが自然と密接に結びついています。

「自然」は、私たちにとって、「なくてはならないもの」、「身近にあるもの」、「あるがままのもの」、「見守ってくれているもの」として、また愛情や畏敬の念をもって接していく対象として、存在し続けているのです。

そこで、このプログラム集では、田んぼ・川・湖などの「場所」、花・虫たち・草木・落ち葉・石ころなどの「モノ」、おひさまの陽・風・雨などの「現象」、それをとりまく環境すべてを、「自然」ととらえることとします。



琵琶湖のほとり



落ち葉のお布団でごろごろ



カマキリのふ化

自然の中で知るいのちの尊さ 自然とわたしたちとのつながり

自然の中で生きているすべてのものの関わりあいを知り、自然を好きになったり、いのちの尊さを感じとったりするためには、自然と直接ふれあうことや、自然の中で生まれ、成長し、死んでいくさまざまな生き物との出会いが大切です。

次のステージへの基盤づくり

幼児期において、体験を通じて自然の循環や自然と人の暮らしとのつながりを学び、周囲のさまざまな環境に好奇心を持つことは、小学校の低学年において取り組まれる生活科等の体験学習への円滑な継続につながります。そして、小学校の高学年になり、身近な環境に自ら関心を持ち、学び、理解を深め、課題を見つけ、行動するといった場面において、その体験が総合的に発揮されることにつながります。

幼児期から発達段階に応じて培っていく「地域の身近な自然を愛する心」や主体的な環境保全への行動力は、自分たちの地域環境は自分たちでよくしていこうという「環境自治^{※1}」のまちづくりへの基盤となるものです。

さまざまな人が関わって 世代から世代へ



地域の人の協力を得て
干し柿づくりのお手伝い

自然体験においては、自然との直接的なふれあいのほか、自然とともに生きる智慧や工夫により自然のバランスを損なわない暮らしを学び、次の世代へ伝えていくことが大切です。その意味で、若い世代にとって、経験者はモデルとして大切な存在です。環境を健全な姿で次世代に引き継ぐための行動やライフスタイルの創造のためには、さまざまな人たちが互いにかかわって取り組んでいくことが大切です。

小さな環から大きな環へ

幼児期においては、まず、生活に身近なところで気に入った植物や場所を見つけ、そこにあるものに愛着を持ちます。そして、四季を通じてそれらの様子を見ることで、周りのものたちとの関わりや役割に気づき、虫や花や木の自然のつながりを学んでいきます。

それに関わる大人は、人間が地球規模の大きなつながりの環の中で生きていることへの気づきを促し、環境問題の解決に向けた具体的な行動を主体的に実践していく“芽”を育むという意識を持って、子どもたちと関わることを求められます。

自然体験を通して、その想いをメッセージとして子どもたちに届けるための工夫や支援者（大人）^{※2}の姿勢、具体的な取組内容について考えてみましょう。

※1 環境自治：

地域の環境と深い関わりをもつ住民が中心となって、事業者や行政との協働により、地域に根ざした環境の保全・創造の取り組みを進めていくこと。

※2 支援者（大人）：

ここでは、幼児を対象とした自然体験学習に関わる保育者（教諭・保育士）、保護者、地域の人々などのことを意味します。